

佛乗寺檀信徒の皆さまへ

日蓮正宗 佛乗寺 住 職 笠原建道

私たちの信心は世界一の信心

『妙法蓮華經方便品第二』

諸仏の智慧は甚深にして無量なり。其の智慧の門は、難解難入なり。

(大石寺版 『新編法華經并開結』 八八頁)

現代語訳

多くの仏に備わっている智慧は、甚だ深く、はかり知れないものである。其の智慧は理解し難たくその門には入り難いものである。

これは朝晩読誦する法華經方便品の冒頭の文です。

どこにあるか分からない方は、お經本を開いてみて下さい。一番最初の所です。「諸仏智慧 甚深無量 其智慧門 難解難入」とあるところです。この漢文を仮名交じりの文に書き改めることを「書下し文」といいます。それが前述の方便品の文です。

毎朝毎夕読んでいても、書き下しにすると意外に分かりませんね。

参考までに、現代語の訳を付けておきました。現代語に訳しても「難解」です。方便品の最初に、難しい教えである、理解することも入ることも難しい、と説かれているお經文を私たちは朝夕読んでいるのですから、その挑戦する力、チャレンジする魂は、オリンピック選手にも負けておりません。素晴らしいことだと思います。

因みに、仏法では「智慧」の智は差別を、慧は平等を意味します。したがって、智と慧の両方がそろって始めて真実の智慧、とすることになります。

天台大師がこの經文を解釈した、『法華文句』を見ますと、

『法華文句』

仏の智慧は豎に如理の底に徹することを明かす。故に甚深という。横に法界の辺を窮む。故に無量という。無量甚深にして、深く高く横広し。譬ば根深ければ則ち条茂く、源遠ければ則ち流れ長きが如し。

(富士学林版 『訓読法華文句記会本上』 五三一頁)

とあります。

意味は、仏様の真実で平等の智慧は、豎、つまり時間軸で、過去・現在・未来という三世を貫くものである、ということです。さらに、横、こちらは空間的広がりの中で、宇宙のことと考えることができます。その宇宙を、端から端まで見通すことを「法界の辺を窮む」とのべられております。

この宇宙が誕生してから一三八億年、地球が生まれて四五億年、人類の先祖といわれるホモサピエンスの出現は二〇万年前、といわれております。これは現在の科学的な知見です。それよりもさらに深いところを仏様の智慧は見通されている、ということ、を、「如理の底に徹す」、「法界の辺を窮む」と言う言葉で天台大師は表されるのです。ですから、私たちの知恵で量ることができなくてあたりまえです。

法華経で説かれる、この広大で限りない仏様の智慧を、天台大師は、大木の深い根と、大河の遠い源に譬え、法華経を信仰する私たちの立場を教えて下さっております。深く根を張はった大木は、簡単には倒れません。暑いときには日陰の、雨の日には雨宿りの役目もあります。久遠の昔に源を発し、滔々と流れる大河は、仏様の慈悲であり、私たちが受ける功德です。

法華経の大木に護られる功德、大河のような功德の中に身を置いている貴い過去世からの因縁を思わずにはおられません。

このお経文の「智慧」と「門」について、大聖人様は『御義口伝』で、

『就註法華経口伝』（『御義口伝』

智慧とは一心三智なり、門とは此の智慧に入る処の能入の門なり、三智の体とは南無妙法蓮華経なり、門とは信心の事なり（乃至）今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱へ奉るを智慧とは云ふなり（乃至）今日蓮等の類は此の智慧に得入するなり。

（新編御書・一七二七頁）

と示され、智慧の本体が南無妙法蓮華経の御題目であると、教えて下さいます。

もう少し詳しく拝しますと、経文で説かれる「智慧」は一切智・道種智・一切種智の三種類の智慧のことです。なかでも一切種智は、全て（一切）の普遍的な真理を智（さと）るばかりか、種々の差別的な面を知り尽くした仏の智のことです。天台大師はこの三智は別々に覚るのではなく一心に三智が同時にそなわる、と説かれております。

そして、仏の究極の覚り最高の覚りの入り口が、「門」であり、その覚りの本体、根源は南無妙法蓮華経の御題目である、ということです。そして、その覚りの門に入るには信が大切である旨を御指南下さるのです。続いて、

今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るを智慧とは云ふなり（同）  
と示され、大聖人様の教えに従って富士大石寺に御安置される大御本尊様を的  
として南無妙法蓮華經と唱題することが「智慧」であると仰せです。さらに、  
今日蓮等の類は此の智慧に得入するなり（同）  
と御指南です。

つまり、「難信難解」、仏弟子の中で智慧第一といわれる舍利弗ですら理解す  
ることが難しい、と説かれている仏様の智慧を、末法の世に生を受けた私のよ  
うな愚かな者であっても、南無妙法蓮華經と唱えることで 我が身に得ることが  
できる、と大聖人様は教えて下さるのです。

さらに『法華取要抄文段』です。

#### 『法華取要抄文段』

正に本門戒壇の本尊所住の処、即ちこれ根源なり。妙楽云く「像末の四  
依、仏法を弘宣す。化を受け、教を稟け、須く根源を討ぬべし。若し根源  
に迷う則は増上して真証に濫る」等云云。今、日本国中の諸宗・諸門徒、  
何ぞ根源を討ねざるや。浅間し、浅間し云云。宗祖云く「根深ければ枝繁  
く、源遠ければ流れ長し」(取意)等云云。凡そこの本尊は久遠元初の自  
受用の当体なり。豈根深く、源遠きに非ずや。

(富士学林版『日寛上人文段集』・五四三頁)

これは、ご承知のように、総本山二十六世日寛上人が、大聖人様が文永十一  
年五月二十四日に、富木常忍に与えた『法華取要抄』を解釈されたものです。

ここで、本門戒壇の大御本尊様が『根源』である、と明確にお示しです。続  
いて、妙楽大師の弘決の文を引かれて、根源の教えを尋ねることが大切であり、  
根源の教えに迷う者は、覚ることがないのに覚ったと思う増上慢になり、それ  
は真実の覚りを乱すものとなる、と厳しく戒められております。

#### 創価学会に根源はありますか

この日寛上人の戒めは、現在の創価学会にそのまま当てはめることができま  
す。日蓮正宗が創価学会を破門して二十五年が過ぎました。根源の法である本  
門戒壇の大御本尊様から退転した彼らは、多くの人々の信仰を乱し、我が国ば  
かりか世界中に暗い影をおとしているではありませんか。

日寛上人の仰せのままの姿になっていると知り教えられるのは、私たち法華  
講衆だけであることを忘れてはなりません。

彼らは、日寛上人が御書写下された御本尊様に似せた、所謂「偽本尊」を受

持の対象としております。その日寛上人の仰せを示し、信仰の誤りを指摘し、正しい筋道に引き戻すことが私たちの使命の一つです。

根源を知り、根源のお教えに身をおいていることを自覚して、そこに身を置いている幸せを思います。

何故ならば、根が深く源が遠い、との譬は、深く大きな悩みにも応えて下さる教え、御本尊様である、ということだからです。

どのような困難があろうとも、深く広い教えで、問題や困難を解決することができるのが私たち日蓮正宗の信仰です。大御本尊様の功德です。

まだまだ世の中に知られていない私たちの信仰ですが、人生を切り開いて行くことのできる智慧が秘められている仏様の教えがここにあることを忘れずに、財物を持っていることだけに満足することなく、財物を生かすことを心がけ、さらに輝かせる唯一の方法である、折伏に励むことが大切になってまいります。

繰り返します。私たちは、お経文の中で最も理解し難く入りがたい法華経を持っております。その功德は、三世と全宇宙のことを知る仏の智慧と等しい智慧を、私たちの命の中に受けることです。私たちが御本尊様にお題目を唱える時には、仏様の智慧はわが智慧となって顕われます。そのことを固く信じ、自信と誇りを持って、共に進むことを決意し、明年に向かって有意義な十一月・十二月を過ごしましょう。世界一の信心は私たちの命の中にあります。

寒くなります。ご自愛をお祈り申し上げます。